

吉備国際大学研究紀要
(社会福祉学部)
第21号, 109-115, 2011

「間伐材×アート」のデザイン —猪とうり坊たち—

寺見 章*, 谷内眞之助**, 村田 浩一***

A design of “the forest thinning materials × art” —A wild boar and wild boar's children—

Akira TERAMI*, Shinnosuke TANIUCHI**, Koichi MURATA***

Abstract

The effective use of timber resources is a problem in Japan. Especially, the import of the timbers for architecture causes the ruin of the forests and the decline of the local industries and leads to serious environmental damages.

The Local governments are tackling these problems and their activation.

This activity is aimed at protecting the forests by making wooden works with timbers thrown away and exhibiting them, and this is the report on the execution in Shiso City in Hyogo Prefecture.

This project by some artists and the municipality may show one of the possibilities that art can play a greater role on the solution of the environmental problem.

Key words : SATOYAMA, Monument, Community

キーワード : 里山, モニュメント, コミュニティー

I. はじめに

2007, 2008年度におこなった本活動は, 間伐材を活用した造形作品をつくり展示することによって, 芸術文化あふれる地域づくりから森林保全を図ることを願っての計画であり, この実践報告は, 2008年

に兵庫県の宍粟市で実施したものである。

II. 趣 旨

間伐材は貴重な資源と考えることができる。その有効活用をはかることは森林整備の促進, ひいては

* 吉備国際大学社会福祉学部子ども福祉学科
〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町 8
Department of Child Welfare, School of Social Welfare, KIBI International University
8, Igamachi, Takahashi, Okayama, Japan (716-8508)

** 福井工業大学 工学部 デザイン学科
Department of design, School of Engineering, Fukui University of Technology

*** 木工房ムークス
MUKUS Wood-studio

森林を健全に育て、国土や水資源の保全、地球温暖化防止など森林の公益的機能を発揮させることになる。里山の荒廃が問題になっている近年、豊かな森の再生と復活は、地球環境を守るための我々の責務であろう。

間伐材を活用したアート作品にふれて、子供たちだけでなく多くの人々が、木の感触を五感をとおして味わい、間伐とは何か、そして地球環境と森林、里山の大切さを意識下に持ってもらいたいとの思いを含んでいる。

Ⅲ. 経 緯

1992年に兵庫県宍粟市に財団法人「しろう森林王国」が発足し、森林をはじめ豊かな自然資源を守り、ドングリの森づくりなどの事業を進めていた。2006年宍粟市に兵庫県内5つ目のふるさと森林公園として兵庫県立「国見の森公園」がオープンし、しろう

森林王国に公園の管理運営事業が含まれた。

国見の森公園の開園1周年を迎え、新たな活動や事業が模索される中で環境をふまえた芸術的活動による地域づくりの案が持ち上り、活動は兵庫県からの要請を受けて始まる。

A. 初年度

2007年は、宍粟材による間伐材アートを展開して行くためのキックオフと位置づけられた。発表は、県主催の秋に開催するふれあいの祭典とされ、その後の展示は、宍粟市内の公園施設での設置が想定された。

テーマは子供たちが喜ぶものとの意見からカブトムシ、クワガタ、トンボ（写真下）、テントウムシを選定、大きさは移動展示が予定されていたため2tトラックで搬送可能なサイズに決定。日程や制作場所の調整などにより制作日数が10日間に限定されたため、坪田昌之、中村文治、高尾浩和、崔石鎬たち、



(図1)「猪とうり坊たち」2008 兵庫県立「国見の森公園」 宍粟市



(図2) カブトムシ、トンボ、クワガタ 2007 兵庫県立「国見の森公園」 宍粟市

兵庫県在住や関わりのある彫刻家の協力を得て完成に至る。

B. 2年目

2008年は里山の自然を象徴するモニュメントの制作を提案、合意は得ていたが、初年度の作品が各方面から好評を得たため、森林王国からは、より注目度があり喜ばれるだろうということで、モニュメントではなく象やキリンなどの形をした大型遊具(滑り台)的のものはどうかという希望が出された。参考として示された資料は、デザイン的には普遍性と既視感があり無難な造形ではあるが、テーマやかたちに場所の特性と関連づけられるところがなく、必然性を伴わないために親しみが持続しないと思われた。また、予算規模や制作期間等の制約からも実現が困難であった。そこで、前年のテーマを継続して地域に根ざしたイナゴやショウジョウバッタ、特産のタマネギなどを提案するが、前年の成果をさらに発展させていきたいという方向性からは弱いものと受け取られた。協議を重ねながら地域「らしさ」を再考する中で「しし鍋」の宍粟から「猪とウリ坊たち」で合意が得られた。

制作場所は市内はずれの材木倉庫となり、制作日程は土日を挟んで5日間×5クルの予定をたてて実行された。

IV. 制作

本報告では、間伐材のアー트의活用の一例として、2年目の取り組みにおける作品制作の実際を示す。1年目のカブトムシ、トンボ、クワガタ、テントウムシは、モニュメントとして鑑賞するためだけのものではなく、子どもたちが触ったり乗ったりして遊ぶことが出来るようなデザインになっている。子どもは木登りが好きであるが、それは登るという身体運動から得られる体感的快と高い位置に身を置く緊張感、高視点からの眺望がもたらす視覚的快を求めている行為と思われる。これはジャングルジムなどの

人工的で無機的な遊具でも得られるが、木の場合はその上に、金属に比べてやさしい触感や人の腕のような形状などから抱かれているような心地よさも感じているのかもしれない。また、不規則な形状が要求する状況判断も冒険心、挑戦する気持ちを刺激するのだろう。

このような木を使った動物・生きものの造形は、触感からその柔らかさやぬくもりが感じられ、同時に生きものの生命感をより強くあたえる。また、実寸とは異なるサイズのかたちは子どもをイメージの世界にみちびくことになり、子どもが生きものを身近で親しみのあるものとして受け入れることができるようになる手助けとなるだろう。

そのようなことから、今回制作した猪とその子どもたち(うり坊)は、実際よりも大きいサイズで制作されることになった。

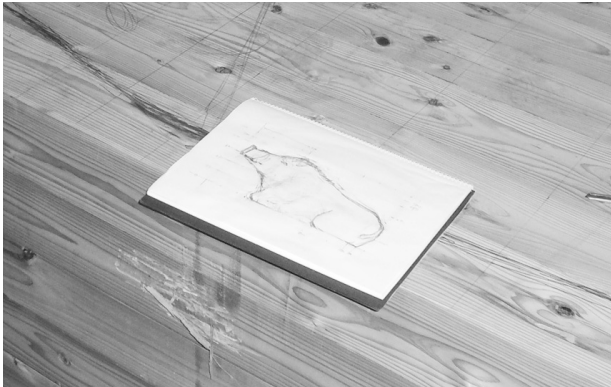
1. 猪の制作

1) 材料

杉の間伐材を使用した。一木で作れるような太い材はないので、かたまりとして大きさのある造形物を制作するためには、どうしても集成圧着(寄せ木)して材料としなければならない。間伐材の場合乾燥が十分でないものを使用することになるので、集成後、乾燥時の収縮で接合部が開く恐れがある。厚みのある材ほど収縮力が強いので、猪では柱材として角材に製材されたものを集成圧着して使用した。



(図3) 猪用集成材 地元の木工場でプレス機で圧着してもらう。



(図4) 猪下絵 耐久性の問題から、細いために早く痛みやすい足は折り曲げて座ったポーズにして体と一体にした。そのためボリューム感が増すと同時に子どもの視点から猪の顔が近くなり親しみが増した。



(図7) だぼで補強 接着面が収縮によって隙間を生じるため丸棒のだぼを埋めて発生を防ぐ。



(図5) 粗彫り1 下絵をもとにチェーンソーで粗取り。



(図8) 毛並みをだす ほぼかたちが出たところで、チェーンソーで毛並みのテクスチャーを出す。



(図6) 粗彫り2 チェンソーで大まかな形をだしていく。



(図9) 仕上げ彫り 目、耳、鼻先などの細部はのみを使って仕上げる。



(図10) 猪の彫りが完成



(図13) 足取り付け穴あけ加工 うり坊の足は、間伐材の成形丸太を差し込むことによる。

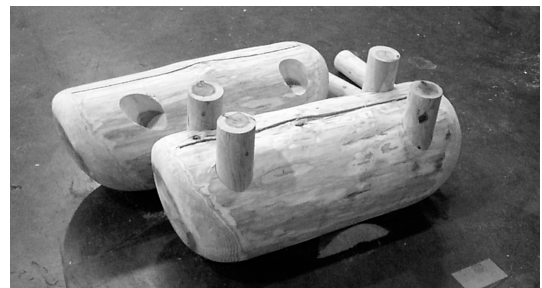
2. うり坊の制作過程

1) 材料

子どもの猪(うり坊)は3種類の大きさで作り、変化を持たせることにする。集成材ではなく丸太を使用した。



(図11) うり坊用丸太 この材から、大4, 中4, 小5頭の計13頭をつくった。



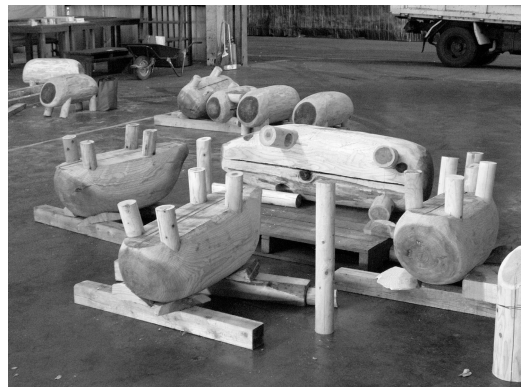
(図14) うり坊 (小)



(図15) うり坊 (中)



(図12) うり坊 (中) 粗彫り 同じくチェーンソーを使いかたちをだす。



(図16) うり坊たち 大, 中, 小で頭部のデザインと足の取り付け角度を変えて, うり坊の成長度の違いを表現した。細部は省略し, 単純なフォルムにまとめてうり坊の生命感とあいしさを表現した。

2) 塗装

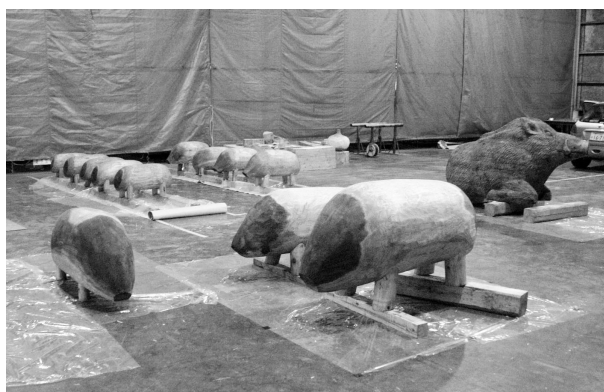
屋外に設置するため、耐水性のある防腐、防虫塗料を塗布した（3回塗り）。



(図17) SikkensのセトールHLSを使用した。



(図18) 塗装 塗装は地元のボランティアの方が協力してくれた。



(図19) 完成

V, おわりに



(図20) 間伐材アートin淡路2008

間伐材アートはモニュメントとしての芸術作品であるが、人と森を結ぶインターフェースと捉え、広義のデザインと位置づけることが出来よう。近代以降、アートは美術館や博物館で鑑賞するものと思われるが、伝統にある『しつらい』こそが我が国の芸術の原点ではなかろうか。そこには、絵画や彫刻や工芸の造形物と庭から自然までもが融合する空間が作り出され、デザインされている。「間伐材×アート」の実施は、日本的なアートとデザインのあり方の再考をもくろんだ計画の実践でもある。

本来モニュメントには恒久性が求められるが、屋外に設置される木の造形物であることを考えると防腐処理を施したとしても耐用年数は15年程度であろう。このことは15年をサイクルとして、森と人々のくらしの関係を考え直すことになり、再びアートとコミュニティーの協働により新しいシンボルの創造がなされることになる。このことは、次代につないでいくことでもあり、日本の精神にも相応しいありかただと思われる。

今回の活動は自治体と団体の取り組みであるが、制作は、デザイナー、彫刻家、チェーンソーアーティスト、地元企業、ボランティアの人たちのボランティア精神で行われた。場の可能性を引き出すアートの力が発揮されたものである。

目標の実現には、地道な活動を継続させて行くこ

とが不可欠である。実施に当たっては、費用や調整など見えない作業が多々ある。意見や要望をしっかりと確認しあうコミュニケーションを深めることの大切さ、喜んでもらえることを予算の中でどのように

実行できるかの知恵を出し合うこととボランティア精神の必要性を改めて実感した。今後の課題は、関係者みんなが楽しんで参加できる素地を作り上げて行くノウハウの構築と作成にある。

※本稿は、環境芸術学会第11回大会（2010年10月17日、於：埼玉大学）における発表（連名発表・ポスター）に加筆および写真を追加したものである。

